

ガンゲーシヤの苦滅論

山 本 和 彦

はじめに

新論理学派 (Navyanaiyavika) のガンゲーシヤ (Gangesa, c. 1320) の解脱論では、解脱の定義・解脱のプロセス・他者の定義の批判・苦滅論・知行併合論 (jñānakarmasannuccayavāda)・享受 (bhoga)・真理知 (tattvajñāna) などのトピックスが論じられている。このなかで特徴的な議論は苦滅論である。ニヤーヤ学派にとって「人間の目的」(puruṣārtha) は「苦の滅」としての解脱であるが、その苦 (duḥkha) の滅 (divanśa, nāśa, abhāva, nivṛtti) とは何かという問題である。⁽¹⁾

『タットヴァ・チンターマニ』(Tattvacintāmaṇi)「解脱論」(Muktivāda)の冒頭でガンゲーシヤは解脱 (apavarga) を定義する。それに対して、対論者は苦の滅は人間の目的にならないと言う。次に、苦の滅とは「苦の生起者の滅」(duḥkhasādhanaśāsa)なのか「苦の未生起」(duḥkhanutpada)なのかという議論になる。まず苦の生起者の滅論者が勝利するが、後に苦の未生起論者が勝利する。その後、苦の生起者の滅論者は「苦の絶対的非存在」(duḥkhatyan-tābhāva)論者(ヴァッラバ Vallabha, c. 1100-1150)として、そして苦の未生起論者は「苦の過去の非存在」(duḥkha-prāg-abhāva)論者(プラバーカラ派 Prābhākara)として再登場するが、共に苦滅論者に敗れる。この一連の議論のなかで現

れる「苦の生起者の滅」と「苦の未生起」とに関連する議論について以下考察する。

人間の目的

人間の目的は何か。ミーマーンサー学派 (Mīmāṃsaka) によれば、祭式行為によって天界に生まれることであるが、さらに祭式行為そのものが人間の目的でもあった。⁽²⁾しかし、他のヒンドゥー教哲学では、人間の目的は解脱である。そして解脱とは苦の滅 (duḥkṣhadvansa) もしくは楽 (sukha) である。人間の目的としての苦の滅とは何か。

ガンゲーシヤは、人間の目的は人間の努力 (puruṣaprayatna) に基づく真理知によつて成立すると言う。⁽³⁾人間の目的になぜ努力が必要であるのかについては、すでに『ニヤーヤ・ストトラ』(Nyāyastotra, c. 150) において論じられている。⁽⁴⁾人が熟睡して夢を見ていないとき、その人には煩惱がない。煩惱がない人は苦が生じることなく解脱状態にあると言える。熟睡している人は苦の滅のための努力がない。その人は解脱しているわけでもない。さらに、瓶には苦がないので解脱状態にあると言える。しかし瓶は努力もしておらず、解脱しているわけでもない。⁽⁵⁾したがって、これらの場合を解脱の定義から排除するためにニヤーヤ学派は努力の必要性を主張する。

真理知から解脱に至るプロセスのなかで、努力や真理知など解脱の構成要素が時間的な因果関係によつて成り立っていることがわかる。真理知による誤知の滅・誤知の滅による過失の滅・過失の滅による活動の滅・活動の滅による出生の滅・出生の滅による苦の滅という順番が解脱のプロセスである。⁽⁶⁾苦は人間の努力を伴う真理知によつて滅する。ガンゲーシヤはこれを肯定的否定的随伴 (anavayayitika) と言う。⁽⁷⁾真理知があれば解脱はある。真理知がなければ解脱はない。⁽⁸⁾

苦

苦の滅が解脱であるが、その苦とは何か。『ニヤーヤ・スートラ』では「さまざまな苦悩と結びつくようになるから、出生が起こることが苦に他ならない」と言われている⁽⁹⁾。生まれてくることが苦であり、それはアトマンが身体と結合することである。身体は苦の基体なので、身体がなければ苦はないことになる。さらに、12世紀の正理・勝論学派の綱要書『サプタ・パダ・アルティー』(Saptapadathī 七句義論)によれば苦は21種類ある⁽¹⁰⁾。身体・眼耳鼻舌身意という六つの感覚器官・色声香味触と楽等アトマンの属性という六感官の対象・感官と対象との接触の結果としての六つの知識・楽・苦である。楽と苦以外は苦の基体や手段や原因である。苦が混合した楽は苦と見なされるので楽も苦である。しかし、ここでは苦そのものの分類がないのだが、註釈者によれば蛇や棘から生じる苦の滅は解脱ではない⁽¹¹⁾。後述するが、蛇や棘という苦の生起者の滅は人間の目的ではない。

苦の滅

ガンゲーシヤは解脱を「またそれ(解脱)は、同じ基体(人間)において、苦の「過去の非存在」と共存しない苦の滅(苦の未来の非存在)である」と定義する⁽¹²⁾。

「過去の非存在」とは、始まりが無く、終わりが有る非存在である。まだ焼かれていない黒土の瓶に焼かれた後の色である赤色は、瓶が焼かれて赤くなるまで存在しない、という場合である。苦の過去の非存在は、苦が無始以来存在せず、かつ未来に存在する非存在である。「苦の滅」の「滅」(dhvansa)は、消滅以後の非存在(dhvansābhāva)であり、始まりが有り、終わりが無い非存在である。すでに焼かれた赤い瓶に焼かれる前の黒土の色は、既に滅しているので存在しない、という場合である⁽¹³⁾。苦の滅(dhikhadvansa)は、過去に苦があり、未来に苦がない非存在であ

る。

ガンゲーシヤの定義では、解脱とは苦が過去にあり、その苦が滅して未来に再び生起しないことである。さらに過去の苦の基体（人間）と苦が滅して生起しない基体とは同じ基体でなければならぬ。解脱とは苦の滅のことであるが、その苦の滅は誤知の滅による。誤知の滅は人間の努力をともし真理知による。真理知はヨーガから発生した純粹なダルマから生じる⁽¹⁴⁾。解脱に至るこの一連のプロセスのなかに祭祀行為はない。したがってガンゲーシヤは知行併合論を批判し、知識のみによる解脱を主張する⁽¹⁵⁾。

苦の生起者の滅

苦の滅とは何か。ガンゲーシヤはふたつの解釈を暫定的に提示する。「苦の生起者の滅」と「苦の未生起」とである。苦の滅を苦の生起者の滅と解釈することはウディョータカラ⁽¹⁷⁾（Uddyotakara, c. 610）、ヴァーチヤスバティ・ミシユラ⁽¹⁸⁾（Vācaspati Miśra, 976/77）、ウダヤナ⁽¹⁹⁾（Udayana, 984/5 or c. 1025-1100）なども行っている。さらに、ガンゲーシヤ以降の新論理学者であるラグナータ⁽²⁰⁾（Raghunātha Śrīromaṇi, c. 1510）やガダーダラ⁽²¹⁾（Gāḍhara Bhāṭīcārya, c. 1660）は、「悪の滅」⁽²²⁾（pāpanāśa, dūṛitanāśa）について盛んに議論する。

ガンゲーシヤの対論者は、解脱を「苦の過去の非存在と共存しない苦の生起者の滅が解脱である」と定義する⁽²¹⁾。苦の生起者（duḥkhasādhana）とは、われわれの日常生活では蛇や棘などであり、ヴェーダ世界では悪（papa）である。これらを滅することが人間の目的だという考え方である。苦の生起者の滅は、補助なしでそれだけで成立する。つまり、蛇や棘の滅に何らかの別の手段は必要ない⁽²²⁾。さらに、蛇や棘の滅に関しては、蛇や棘という苦の生起者の滅に対する意欲に基づいて人間は努力するので、苦の生起者の滅が人間の目的である⁽²³⁾。苦の未生起も、苦の生起者の滅を通して成立するから、苦の生起者の滅が人間の目的である⁽²⁴⁾。つまり「苦の生起者の滅」は努力を伴い、他の補助なしで

成立するから人間の目的であるというのが対論者の考えである。

しかし、人間の目的は「苦の滅」であり「苦の生起者の滅」ではない。これをヴァツラバは限定者 (visesana) と被限定者 (visita) との関係によって解決しようとする。⁽²⁵⁾ ヴァツラバの解脱の定義は、「苦の絶対的非存在」であるが、彼はこれを「自分に存在する苦と絶対的非存在との関係が、苦の生起者の滅」であると解釈する。⁽²⁷⁾ つまり「苦の絶対的非存在」は、「苦」と「絶対的非存在」との関係であり、さらにそれは「苦の生起者の滅」に他ならないと言う。

「苦の絶対的非存在は苦の生起者の滅である」という文章の限定者は「苦の生起者の滅」であり、被限定者は「苦の絶対的非存在」である。「AはBである」と表現する場合、主語であるAは述語であるBに限定されている。したがってAは被限定者である。BはAを限定しているためBは限定者である。対論者は限定者が成立している場合、被限定者も成立すると主張する。したがって人間の目的である「苦の絶対的非存在」は成立する。これは「苦の生起者の滅」の被限定者なので「苦の生起者の滅」も間接的には人間の目的ということになる。しかし、ガンゲーシヤは「苦の生起者の滅」と「苦の絶対的非存在」とは結合しないと行ってこの説を退ける。⁽²⁸⁾

苦の未生起

苦の未生起とは、苦が生じないことである。苦が生じない限り解脱していると言える。苦の未生起は、苦の生起者を滅す努力がある限り続く。苦の未生起は無始・有終という過去の苦と同じ特徴を持つ。過去の苦はブラバーカーラ派の考えである。⁽²⁹⁾

未来に生起しない苦に対して、現在人間の努力があるから、苦の未生起が人間の目的である。⁽³⁰⁾ 具体的には、苦を生じさせない贖罪に人間の努力がある場合、苦の未生起に対して努力があることになり、苦の未生起が人間の目的である。⁽³¹⁾ 苦の生起者が滅すれば、それらによって「生じる苦はない」から、この「苦の未生起」に対して人間の努力があ

ることになる。⁽³²⁾つまり、アダルマ(悪)という苦の生起者の贖罪による滅が「苦の未生起」なのである。

「苦の未生起」と「苦の生起者の滅」との内容は、共に苦の生起者の滅であり、同じである。苦の生起者の滅は苦の滅ではないので人間の目的ではない。しかし、苦の未生起に関しては、苦の非存在と考えれば、苦の滅も苦の非存在なので、人間の目的である。

プラバーカラ派は、無終の「苦の過去の非存在」が解脱であると言う。⁽³³⁾「過去の非存在」は始まりがなく(無始)、終わりがある(有終)の非存在である。終わりのない(avyantika)過去の非存在(無始・有終)とは、無始・無終の非存在、つまり絶対的の非存在(avyantahava)ということになる。絶対的の非存在は、過去・現在・未来の非存在である。絶対的の非存在は努力なしで成立しているので人間の目的にはならない。しかし、プラバーカラ派は、「苦の過去の非存在」は努力による真理知からアダルマの滅があるときに成立すると言う。⁽³⁴⁾さらに、過去の非存在は常住でなく滅するが、絶対的の非存在は常住であり滅することがないので、過去の非存在と絶対的の非存在は同じものではないと言う。⁽³⁵⁾

ガンゲーシヤは、苦の過去の非存在の反存在は輪廻の原因でない苦であると言う。⁽³⁶⁾苦には、輪廻の原因となるものと輪廻の原因ではないものがある。輪廻の原因となる苦を滅すれば解脱するが、輪廻の原因ではない苦を滅しても解脱しない。「苦の過去の非存在」として成立するのは解脱と無関係の苦の非存在である。解脱としての「苦の過去の非存在」は成立しない。したがって、贖罪による「苦の未生起」は解脱ではないことになる。

まとめ

ガンゲーシヤの解脱論では、解脱の定義とプロセスだけではなく「苦の滅」とは何かという問題が追求されている。苦の滅とは「苦の生起者の滅」、「苦の未生起」もしくは「苦の過去の非存在」であるという説が取り上げられるが、最終的には否定される。「苦の生起者の滅」は、それ自体で他の補助なしで成立するが、人間の目的ではない。人間

の目的は「苦の滅」であり、「苦の生起者の滅」ではない。「苦の未生起」は無始有終という「苦の過去の非存在」と同じ特徴を持ち、実質的には同じものである。「苦の過去の非存在」は苦の滅なので人間の目的であるが、無始の苦の滅は成立しない。瓶などには無始の苦の滅は成立しているが、人間の努力なしで成立しているので、人間の目的ではない。したがって、両者とも解脱ではない。

苦の滅が解脱であるが、どんな苦でも滅すれば解脱するというわけではない。解脱に至る苦の滅の苦は、悪 (pāpa, adharma) によって生じたものである。その悪は貪欲 (rāga)・嫌悪 (dveṣa)・無知 (moha) という過失 (toṣa) によって生じたものであり、過失は誤知 (mithyājñāna) から生じたものである。輪廻の根本は誤知であり、そこから順次生じたものの最終が苦である。⁽³⁷⁾

これに対して、蛇や棘という苦の生起者によって生じた苦を滅しても解脱するわけではない。さらに、贖罪 (prāścitta) は苦の生起者である悪を滅する手段であるので人間の目的ではない。解脱はヨーガから生じた純粹なダルマからの真理知によるのである。

註

- (1) 『ニヤーヤ・スートラ』の解脱論に関しては、山本和彦『ニヤーヤ・スートラ』の解脱論、『大谷大学研究年報』六二、二〇一〇、ウダヤナの解脱論に関しては、山本和彦『ウダヤナの解脱論』『仏教学セミナー』九一、二〇一〇参照。
- (2) 片岡啓『シーマーンサー研究序説』九州大学出版会、二〇一一年、一五二頁参照。
- (3) Tattvacintāmani = TC (Gāḍadhari: A Commentary on Dīkṣitī the Commentary by Raghunātha Śrīraṇi on the Tattvacintāmani of Śrī Gaṅgeśa Upādhyaṅva, ed. Dvivedin, V. P. et al., Chowkhamba Sanskrit Series 42, Benares, 1913-27, 2nd ed. by K. Jha, K. & S. Vangīya, Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1970), 2057.1-3. tathā tattvajñānāt savāsānamithyājñānābhāve doṣānupattāu pravṛtyabhāve tādisādūkhadhvaṃsasya mithyājñānocchedadvāra puruṣaparyatnādnaratvājñānasādhyatvat 一「別 (過去や現在) の苦の滅が、〔人間の〕努力なしで成立するとしても、そのような

(未来の) 苦の滅は、誤知の排除を通して、人間の努力に基づく真理知によって成立するから」 Cf. Nyāyasiddhāntaḍḍipā = NSD (Śāradhara's Nyāyasiddhāntaḍḍipā with Tīppana by Gaṅgārāmanī, ed. Matilal, B. K., Ahmedabad: L. D. Institute of Indology, 1976.) 37.1-2: duḥkhāntaradhvaṃsasyāyatmasiddhātve 'pi tathāvidhaduḥkhadhvaṃsasya prayāsaśādhyaṃgābhya-sasādhyaṃvatī | 「別の苦の滅が努力なしで成立するとしても、そのような種類 (未来) の苦の滅は、努力を伴って成立するヨーガの実修によって成立するから」。

(4) Nyāyasūtra = NS (Die Nyāyasūtra's. Text, Übersetzung, Erläuterung und Glossar ed. Ruben, Walter. Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, Band 18, No. 2, Leipzig, 1928) 4.1.59: susptasya svapnādarsane kleśābhāvād apavargah || 「夢を見なごころ、熟睡している人には、煩惱がなごころから、解脱がある」。

(5) Cf. TC 2064.17f: ghatādeś ca na muktratvam | 「しかし、瓶などには解脱者性がなご」。

(6) TC 2057.3-5: tathā tattvajñānāt savāsānamitīyājñānābhāve dośānutpattāu pravṛtyābhāve 'dṛṣṭānutpattāu jāmmābhāve tadṛśāduḥkhadhvaṃso bhavati | 「真理知から、潜在印象を持つ誤知がなくなり、過失が生起せず、活動がなくなり、不可見力が生起せず、(ブートンメンが身体を持って) 再び生まれなごころに、そのような (未来の) 苦の滅がある」。 Cf. NS 1.1.2: duḥkhajñānapravṛtīdośānamitīyājñānānam uttarottāpāpāve tadānantarāpāyād apavargah | 「苦・出生・活動・過失・誤知が、後のものから順次滅するごころ、その直前のものが滅してから解脱がある」。

(7) TC 2057.13f: anvayavyatirekanuvīdhāyinas tattvajñānād anyasyānvīsyamānāyābhāvāt | 「(苦の滅に関) づは) 肯定的・否定的に随伴する真理知と別のものが求められることなごころから」。

(8) ガンゲーシヤは他にも「努力」と「苦の過去の非存在」との肯定的・否定的随伴や真理知と「誤知の排除」との肯定的・否定的随伴を挙げごころ。 TC 2060.6-9 : tena vinā nāstīty anvayavyatirekayos tatra sattvāt | ghaṭe 'pi kṛtau satyām agrīmakṣaṇe tatsattvam tayā vinā neṭy eva kṛtīsādhyaṃvatīm | 「それ (努力) なしでは (苦の『過去の非存在』は) 存在しなごころから。肯定的・否定的随伴が) づでは存在するから。瓶の場合でも、努力があれば、(努力の次の) 最初の時間にそれ (瓶) が存在する」。 TC 2079.25-27: tādṛśānamitīyājñānānāṣe cānvayavyatirekābhyaṃ tattvajñānakāraṇam avadhāritam | ato na tena vinā sa iti tattvajñānāt tattvajñānam avāśyakam | 「また、そのような誤知の滅に対して、肯定的随伴と否定的随伴とによって、真理知が生起者である) づは (この章のなかですでに) 確立している。それゆえ、それ (真理知) なしではそ

れ（誤知の排除）はないから、「ア」でもまた「真理知は必然である」。

(9) NS 4.1.51: vivīdhadhānāyogād dūḥkham eva jannoppatthi |

(10) Saptapadārthi (*Saptapadārthi: A Manual of the Vaiśeṣika System with Madhva's Mīthabhāṣinī, Śeṣananta's Padārthacandrikā & Balabhadra's Sāndarbha*, ed. Bhattacharya. Amarendra Mohan & Bhattacharya, Narendra Chandra Bagchi, Calcutta Sanskrit Series No. VIII, Calcutta, 1934), 55 (p.45.1f): dūḥkham tu śarīraṃ śaḍ indriyāni tadviśayāḥ śaḍ buddhayaḥ sukhaṃ dūḥkhaṃ cety ekaviṃśatīprakāraṃ | 「苦レ 身体・六感官・その対象・六知識・樂・苦ト」二十一種類ト也」。

(11) Mīthabhāṣinī Comm. on SPA 42.16f: ahikāntakādījanyadūḥkhābhāvāsya susuptau vartamānadūḥkhābhāvāsya ca mokṣatvaṃ mā bhud iti samastei padam | 「「脱」と「睡」中に存在する苦の非存在トが解脱トであるから」」。

(12) TC 2055.5f: sa ca samānādhikarāṇadūḥkhaprāgabhāvāsahavrttīdūḥkhatvansaḥ | ガンダーシーヤの解脱の定義に「つづつ Wada, Toshihiro “Liberation in Early Navya-Nyāya”, *The Way to Liberation: Indological Studies in Japan*, ed. Mayeda, Sengaku, Delhi: Mahohar, 2000, 107-121 参照」。

(13) Nyāyasiddhāntamuktāvalī (*Nyāyasiddhāntamuktāvalī with the Commentary Kīraṇāvalī by Kṛṣṇavallabhācārya*, ed. Nārāyaṇacarana Śāstrī & Śvetavaikunṭha Śāstrī, Kashi Sanskrit Series 212, Varanasi: Chaukhamba Sanskrit Sansthan, 1972) 64.2-65.1: śyāmaghaṭe rako nāsi raktaghāṭe śyāmo nāstīti dhīś ca prāgabhāvaṃ dhvansaṃ cāyaghāṭe na tu tadatyantābhāvaṃ tayor virodhāt | 「(一) [まだ焼かれていない] 黒い瓶には [焼いた後の] 赤色はない。(二) [焼かれた] 赤い瓶には [焼かれる前の] 黒色はない。以上の考えが (一) 過去の非存在と (二) 滅 (消滅以後の非存在 ≡ 未来の非存在) と理解される。それ (以上の考え) は絶対的の非存在ではない。かたつ (赤色と黒色) とも [絶対的の非存在と] 矛盾しているから」。テクニカルな非存在については、山本和彦「インド思想における非存在について」『大谷学報』七四・一、一九九四、四三―四五頁参照。

(14) TC 2073.27-2074.5: atah śrutismṛtyupadīṣṭayogavīdhinā cīranrantarādārasevitanididhyāsanājanayavogajadharmād ātmataṭvasākātkāraṇaṃ sarisārabhūjasavāsananamītyāñānonmūlanasamarthaṃ āśādyā dosābhāvāt pravṛtyāder abhāve

- 'nāgatadharmādharmanūpāde 'nādībhavaśaṅcītakarmaṇām bhogena kṣayād apavṛjate | 「天啓聖典や傳承文学を言われているヨーガの規定によって、長い間、絶え間なく、集中を伴う瞑想によって生じた、ヨーガから生じたダルマから、輪廻の種である潜在印象を伴う誤知を滅する能力を持つ、アートマンに関する真理知を直接体験し、過失の非存在から、活動などがないとき、未来のダルマ（善業）とアダルマ（悪業）が生起しないとき、無始以来集まっている業の享受による滅から、彼は解脱する」。
- (15) TC 2074.30-2075.1: tattvājñānasya karmānārapekṣena muktihetutvapratiśe ca | 「よふに真理知は、行為に依存するものなく、解脱の根拠でもあることが明白であるから」。
- (16) Nyāyavārttika (*Nyāyabhāṣyavārttika of Bhāradvāja Uddyotakara*, ed. Thakur. Anantlal. Nyāyacaturgranthikā Vol. II, New Delhi: Indian Council of Philosophical Research, 1997) ad NS 1.1.22 (p.81.2): tena śarīrādīnā dūḥkhāntenāntyāntiko vīyoga itī | 「解脱とは」それ（じこり）身体から始まり苦で終わるものからの絶対的な別離である」。
- (17) Nyāyavārttikatātparyārikā (*Nyāyavārttikatātparyārikā of Vācaspatiṁśra*, ed. Thakur. Anantlal. Nyāyacaturgranthikā Vol. III, New Delhi: Indian Council of Philosophical Research, 1996) ad NS 1.1.22 (p.200.7): anena jāyamānā dūḥkhaśābdena sarve śarīrādaya ucyanta ity uktam bhavati | 「この苦はじこりじこりじこり、身体を始るとして生じつつあるものがすべて言われるじこり文章がある」。
- (18) Nyāyavārttikatātparyāparisūdhī (*Nyāyavārttikatātparyāparisūdhī of Udayanācārya*, ed. Thakur. Anantlal. Nyāyacaturgranthikā Vol. IV, New Delhi: Indian Council of Philosophical Research, 1996) ad NS 1.1.22 (p.264.14f): śarīrādīṣu pratyogīṣu lakṣiteṣu tannivṛtīrūpasyāpavargasya lakṣanāvasara ity āha krameti | 「身体を始るとして決定される特徴を持つじこりがあるじこり、その否定じこり特徴を持つ解脱の適当な定義があるから『順序』と言われる」。 Cf. Kirānāvālī (*Kīranāvalīrahasyam of M. M. Mathurānātha Tarkavāgīśā*, ed. Gaurinātha Śāstrī. M. M. Śivakumārāsāstrī Granthamālā Vol. 4, Varanasi: Sampurnanand Sanskrit Vishvaśikṣāśālā, 1981) 28. 5f: hetūcchede puruṣavyāpārāt prāyaścittavat | 「根拠の滅に対して、人間のはたらき（努力）が必要であるから。贖罪のよふに」 Cf. NSD 37.5: śāstre hetūcchede puruṣavyāpārād ity āhuḥ | 「論書のなかで『根拠の滅に対して、人間のはたらき（行為）があるから』と言われる」。
- (19) Ātmataṭṭvavivēkādīhīti or Ātmataṭṭvavivēkahāvaṇaprakāśā (*Ātmataṭṭvavivēka with the Commentaries*

Āmatattvavivekabalata of Śaṅkara Mīśra, Āmatattvavivekaprakāśikā of Bhagvathha Thakura, Āmatattvavivekadīpiti of Raghunātha Tīrthika Sīromani, ed. Dvivedin, V. P. & Dravida, L. S. Bibliotheca Indica Work No.170. Calcutta: The Asiatic Society, 1939) 参照。

- (20) Muktiyāda (*Muktiśāda*), ed. Dhundhirāja Śāstri, Benares: Jaykrishna Dass Gupta, 1919) 参照。
- (21) TC 2059.1f: anye tu duḥkha-prāgabhāvāsahavrittīduḥkhasādhanaadhvaṃso mokṣaḥ | 「他の者(ヴァツラバ)は『苦の絶対的非存在が解脱である』」と(三六)°。 See NL 580.1: tatra duḥkhatyantābhāvo 'pavargaḥ | 「ここでは苦の絶対的非存在が解脱である」°。 Cf. NSD 37.23: prāñces tu duḥkhatyantābhāva eva muktiḥ ... | 「ここへ」 古典論理学者たちは苦の絶対的非存在(ここが解脱である)と(三七)°。
- (22) TC 2056.27f: ... ananyagatkaratayā kaṇṭakanaśāsavad duḥkhasādhanaśāsa eva svataḥ puruṣārthas ... | 「他の手段(補助)を伴わずに、棘(苦の生起者)の滅がもたらした『苦の生起者の滅』のみがそれ自体で人間の目的である」°。
- (23) TC 2059.16f: yadicchayā yatsādhane yasya pravṛttis tasyaiva tatprayojanatvam itī duḥkhasādhanaābhāvasyaiva prayojanatvat | 「X(苦の生起者の非存在)の意欲を伴って、X(苦の生起者)の手段に対して、或る人に活動(努力)がある。X(苦の生起者の非存在)こそが、その人の目的である。『苦の生起者の非存在』こそが(人間の)目的であるから」°。
- (24) TC 2060.18-20: tasmād duḥkhasādhanaadhvaṃsamukhena prāgabhāvasyāpi sādhyate | tatraiva kṛtsādhyatvaparyavasānād duḥkhasādhanaadhvaṃsa eva puruṣārtho ... | 「それゆえ『苦の生起者の滅』を通じて、『過去の非存在』が成立するから、この場合にのみ『過去の非存在』は『努力(贖罪による悪の滅)によって成立すること』が結論である。したがって『苦の生起者の滅』のみが人間の目的である」°。
- (25) TC 2064.2f: tathāpi viśiṣṭasya puruṣārthatvam viśeṣasādhyatvena viśiṣṭasādhyatvam ca | 「それでもやはり被限定者(苦の絶対的非存在)が『人間の目的』であり、限定者(苦の生起者の滅)の成立に伴い、被限定者(苦の絶対的非存在)もまた成立する」°。
- (26) TC 2063.25: apare tu duḥkhatyantābhāvo muktiḥ | 「他の者(ヴァツラバ)は『苦の絶対的非存在が解脱である』」と(言へ)°。 Cf. Nyāyallāvātī (Nyāyallāvātī with the Commentary of Vardhamānāpādhyaṃya, Śaṅkara Mīśra and Bhagvathha Thakura, ed. Harihara Śāstri, ChSS 64, Varanasi, Second edition, 1991) 580.1: tatra duḥkhatyantābhāvo 'pavargaḥ | NSD

37.23. prāncas tu dukkhatyantābhava eva muktir ... |

(27) TC 2063.27f: taḥhapi dukkhasādhanaadhivamsa eva svavrittīdukkhasyātīyantaḥābhāvasambandhaḥ | 「それともやはり自分に存在する苦と絶対的非存在との関係が、『苦の生起者の滅』に他ならぬこと」。

(28) TC 2064.13f: api ca dukkhasādhanaadhivamsasya nātyantaḥābhāvasambandhatve mānam asti | 「よぶに『苦の生起者の滅』が、絶対的非存在と結合する場合、手段がなご」。

(29) Muktiavāda (*Muktiavādaḥ*, ed. Dhundhirāja Śāstri, Benares: Jaykrishna Dass Gupta, 1919) 16.1-17.3. yat tu dukkhānūtpāda eva mokṣaḥ sa ca prāgabhāvavṛtāyā janvāpi tattvajñānasādhayāḥ ... tatsādhyatvaṃ dukkhaprāgabhāvāsyeṭi prābhākarānaṃ matam | 「しかし、或る者は苦の未生起のことが解脱である(と言ふ)。またそれは、過去の非存在の特徴を伴い生じるが、真理知によつて成立する。・・・苦の過去の非存在はそれ(真理知)によつて成立する。以上はブラバール派の考へともむ」。

(30) TC 2056.24f: anāgatānūpādām uddīśya kriyamāṇatvāc ca yathā tatra dukkhānūtpādaḥ puruṣārthas ... | 「未来に生起しなごもの(苦)に對して、現在〔贖罪の〕はたごきがあるから。たごえは、このことは『苦の未生起』が人間の目的である」。

(31) TC 2060.1-3: dukkhaṃ me mā bhūḍ ity uddīśya prāyāścittādeau pravṛtter dukkhānūtpādāśyaiva prajojanavāt | 「私が苦が生じませんように」に關する贖罪などに活動があるごう理由で、『苦の未生起』のみが目的であるから」。

TC 2061.28-2062.2: tasmat dukkhaṃ me mā bhūḍ ity uddīśya tatsādhanaadhivamsārthaṃ pravṛtīr itī dukkhānūtpāda eva puruṣārtho na tu dukkhasādhanaadhivamsa itī sūtriam | 「したがごつて、『私に苦が生じませんために』(苦の未生起)に關して、それ(苦)の生起者を滅するために活動があるから、『苦の未生起』こそが人間の目的であり、『苦の生起者の滅』ではないごうごうごうごうが確立した」。

(32) TC 2059.4-6: aḥāhikaṇṭakāpādāpāṇā vā nāśyatān tena tajānyam dukkhaṃ na bhavavīti dukkhānūtpādām uddīśya pravṛtter dukkhānūtpāda eva prajojanam | 「世間における」蛇や棘ごもごもしくは「ヴェエダ世界における」悪は、滅せられるごきごである。それゆえ「悪が滅すれば」、それ(蛇棘ごも悪)によつて生起する苦はないから『苦の未生起』に對して活動(努力)があることになる。それゆえ「苦の未生起」こそが(人間の)目的である」。

(33) TC 2065.3f: prābhākarās tv ātyantīkadukkhapragābhāvo mokṣaḥ | NSD 33.7: dukkhaprāgabhāvaparipālanam itī

- mimāṃsakaḥ । 「苦の過去の非存在の保持であるミニーマンサー学派は〔言へ〕」。 Cf. Prakaraṇapaṭīkā. 341.1-2: ātyantikas tu dehochedo niṣeṣadharmāhamaṇipariśayānibandhano mokṣa itī yuktaḥ । 「しか」 解脱は絶対的な身体断滅であり、すべてのタルマとアタルマとの滅によって生起する」と云ふことである」。 Cf. Jha, G. *The Prabhākara School of Pūrva Mīmāṃsā*. Allahabad, 1911, repr. Delhi: Motilal Banarsidass, 1978, 84.
- (34) TC 2065.6f: kṛtyadhinatattvājñānād adharmanāse saty agrimasamayē duḥkhaprāgabhāvasvarūpam asti । 「努力に依存する真理知からアタルマの滅があるときが最初の時間であり、〔苦の過去の非存在〕自体がある」。
- (35) TC 2065.25f: nityatvenātyantābhāvarūpatayā prāgabhāvānyatvena nāsyajātyatvābhāvāt … । 「絶対的非存在の特徴を持つものは、過去の非存在と異なっており、常住であり、滅する種類のものではないから」。
- (36) TC 2066.8-10: ahikanītakādīnāśapṛāyaścīttādisādhyaḍuḥkhaprāgabhāvasya kalañjabhaksānanapṛāgabhāvasya samānādīkaraṇam eva bhāvīduḥkham bhakṣaṇam ca pratyogī । 「蛇や棘など〔苦の生起者〕の滅によって〔もくは〕贖罪〔苦の生起者の滅〕などによって成立する苦の『過去の非存在』と動物の肉の食事〔苦の生起者〕の『過去の非存在』との反存在は、〔それぞれ〕同じ基体〔自分〕の未来の苦と〔肉の〕食事とである」。蛇や棘などの苦の生起者による苦の滅が解脱でないという議論については、菱田邦男『インド自然哲学の研究』山喜房佛書林、一九九三、二八〇頁参照。
- (37) NS 1.1.2: duḥkhaṇamapravṛttidosamīhyājñānānam uttarotrāpāye tadantantarāpāyād apavargaḥ । 「苦・出生・活動・過失・誤知が、後のものから順次滅するとき、その直前のものが滅してから解脱がある」。